

まじない　はらい　ねがう  
呪い、祓い、願う

## —古代・中世、まじないの道具—

毎年のようにおこる豪雨災害。前ぶれもなく猛威をふるう疫病。21世紀に生きる私たちは、今も自然災害の驚異を目の当たりにし、見えないウイルスにおそれながら暮らしています。こうした災厄に遭遇したり、困難に直面したりすると、人びとは人知を超えた力にすがりたくなるものです。神社に行けば願いごとを書いた絵馬が下げられています。厄年になるとお祓いをうけ、素焼きの小皿でお神酒をいただく方もいるでしょう。古代・中世は今にも増してこうした摩訶不思議な力に頼っていましたが、まじないごとをとる行うためにはさまざまな道具が必要でした。岡山大学構内遺跡からも人々のおもいが込められたまじないの道具が出土しています。

(野崎 貴博)



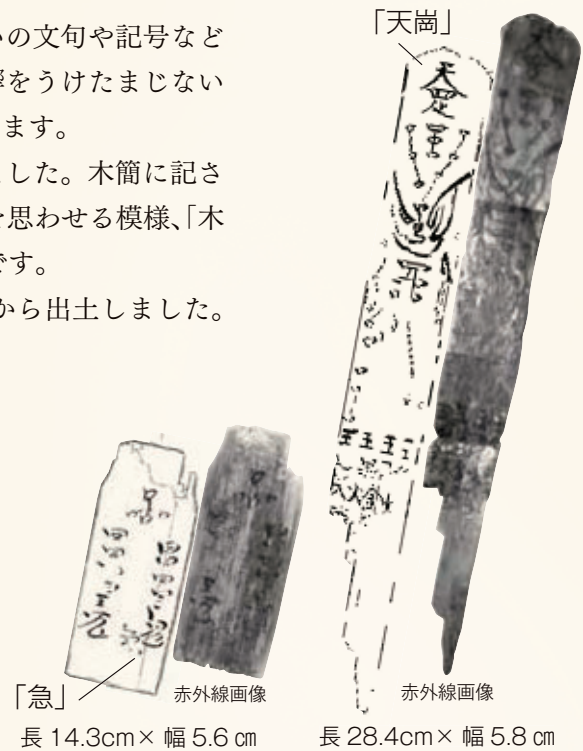
土師器皿の集積(鹿田遺跡 鎌倉時代)  
溝の底に置かれた20枚の皿が繊維質を含む炭化物層に覆われて出土

## まじないふだ

呪符木簡じゆふもっかんには、魔除けのため、道教や陰陽道のまじないの文句や記号などを板に書いたものがあります。今でも道教や陰陽道の影響をうけたまじないふだが門や戸口に掛けられているのを見かける地域もあります。

右の木簡は鹿田遺跡の平安時代後期の井戸から出土しました。木簡に記されたのは、北斗七星を示す「天崗(星)」の文字の下に、鬼面を思わせる模様、「木火金水」・「王王王王」など、「陰陽五行説」に関連する字句です。

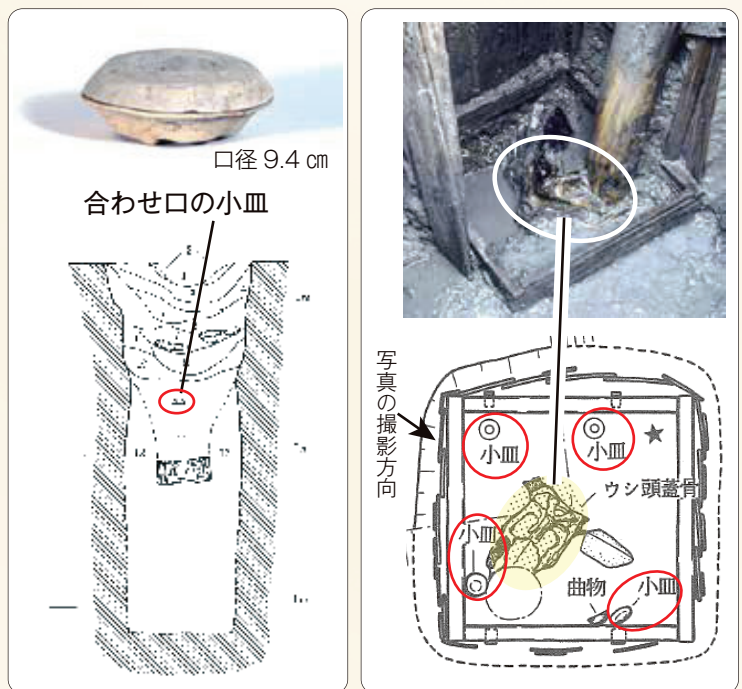
左の木簡は同じく鹿田遺跡の平安時代後期の池状遺構から出土しました。上辺は両方の角を斜めに切り落としています。墨書は、星座をあらわすと考えられる、四角を十字でつないだまじない記号の下に、「急々」の文字があります。これは「急々如律令きゅうきゅうにょりつりょう」という呪句の一部で、「すみやかに事がなるように」という意味の決まり文句です。下端は切断されていますが、さらに下には「如律令にょりつりょう」と書かれていたはずなので、本来はもう少し長い木簡だったと考えられます。



## かわらけ

土器はまじないを行ううえでも重要なアイテムでした。合わせ口のくわせぐち小皿は鹿田遺跡の平安時代後期の井戸でみつかりました。井戸を埋め戻す際、井戸の中ほどに土師器の小皿2枚を合わせ口にして置いたものです。合わせ口の小皿の上位の層では炭や焼土とともに完形の白磁碗や焼けた礫も出土しており、火を用いた祭祀も行われていたとみられます。

同じく鹿田遺跡の平安時代後期～鎌倉時代の始めに埋まった方形縦板組井戸ほうけいたていたぐみの底近くでは、中央に牛頭骨を置き、それを取り巻くように、四隅に完形の土師器小皿を突き立てた状態が確認されました。土器が祭祀の場を画する役割を担ったものと考えられます。



### 合わせ口の土器を用いたまじない

この話では、土器じゆそを呪詛に用いた場面が描かれる。藤原道長が法成寺に参るとき、いつも連れていた犬が御堂の門前で吠え、着物の裾を引いて引き止め、道長に危険を知らせた。道長は急ぎ陰陽師の安倍晴明を呼び、占わせたところ、道長を呪詛するものが埋められているという。土を掘ってみると、土器を二つ合わせ、

『宇治拾遺物語』みどうかんぼく「御堂関白せいめい御犬晴明等奇特ノ事きどく」より

紙縷(こより)で十文字に縛ったものがみつかった。開けてみると中には何もなく、ただ朱砂で土器の底に字が一つ書かれていた。

晴明は「自分のほかに、この術を知っているのは道摩法師である」といい、道摩法師を捕らえて呪詛の依頼者が藤原顕光であったことを明らかにした。

## ひとがた

ひとがた  
人形は、おまじないや祭祀などの宗教的儀礼に用いられた木製品などで、人形木製品は薄い板材を用いて人体を模したものです。穢れを形代に<sup>かたしろ</sup>移し、災いを祓いました。今日の「流し雛」にもみられるように、形代に移した穢れは水に流しました。

津島岡大遺跡の人形木製品は、平安時代後期の溝から出土しました。この溝は幅約12m、深さ約1.5mという大規模なもので、岡山平野の条里を復元すると、東西方向の坪境に合致するものです。水利調節を行うための杭群や給・排水溝もともなっています。

本例は大形で簡略化されていますが、頭部、体部、足部が表現されています。



平安時代後期の  
東西溝



長 54.2cm × 幅 10.4cm

## えま

絵馬は今日でも多くの神社で見られる身近なアイテムです。薄い長方形の板に馬を画いた絵馬に願いを託し、奉納されていますね。

絵馬は奈良時代には出現し、馬形代とともに祭祀に用いられました。もともと奉納されていた生馬にかわり、絵馬や土馬が用いられるようになったと考えられます。画題は馬(稀に牛)でしたが、近世には航海の安全を祈祷した船絵馬が現れ、現代では願い事に応じたさまざま絵柄が描かれています。

鹿田遺跡では、割り貫きの井戸枠を据える奈良時代の井戸から2枚が重なって出土しました。左は馬具を装着した飾馬の手綱をもった猿「猿駒曳」を描いたもの、右は牛がモチーフとなっています。



「猿駒曳」長 12.1cm × 幅 23.4 cm



「牛」長 15.8cm × 幅 21.8 cm

撮影：(株)コンテンツ

### 鹿田遺跡出土の絵馬を商品化してみました!!

出土した絵馬は墨が薄れていましたが、不明なところは類例を参考に描いてみました。岡山大学オリジナルグッズ(右写真)にもなっています。入学試験の頃にはこの絵馬に願いをかける受験生もいるそうです。「人事を尽くして天命を待つ?」、「藁にもすがる思い?」。どちらにしてもご利益があるといいですね。



「猿駒曳」



「牛」

## 最新技術を用いた測量の取り組み

### — 津島岡大遺跡第37次調査 —

測量技術の発展は近年著しく、考古学における種々の分析方法はもとより、発掘調査の記録方法にも影響を与えています。本センターでは、空撮・写真測量用のドローンとそれを活用したSfM (Structure from Motion)-MVS(Multi-view Stereo)を用いた調査記録にも取り組んでいます。SfM-MVSとは、写真から3Dデータを作成する技術のことで、複数枚の重複関係をもつ写真からその位置を復元し3Dデータを構築することができます。ここでは、その成果の一端を紹介しましょう。

津島岡大遺跡第37次調査では、ドローンによるSfM-MVSを用いた測量を実施しました。まず、ドローンを用いて調査区全面を様々な角度から、撮影範囲が60%~80%重複するように複数枚の写真撮影を行います。撮影が終了すると、あとはコン

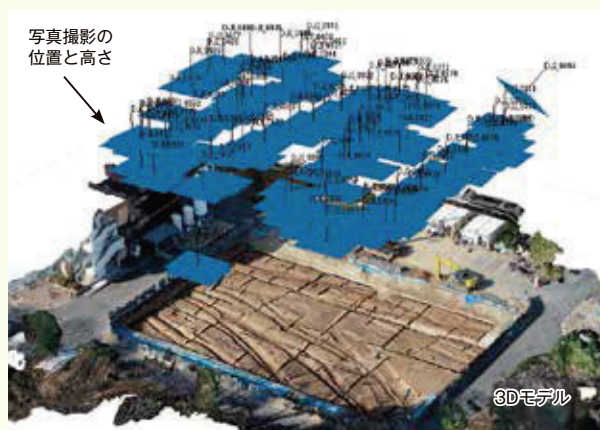
ピュータでの処理となります。

解析の結果、今回は解像度2cmのDSM(Digital Surface Model：地表の高さを表現する数値デジタルモデル)やオルソ画像(正射投影図：真上から見たような傾きのない、正しい大きさや位置に表示される画像)を作成することができました。このデータについてGIS(地理情報システム)を用いて表示させると、簡単に段採図(色分け図)や等高線図を作成することができます。同調査地点では、弥生時代前期には調査区の南側が高く、河道のある東・北側に向かって低くなる状況が見て取れます。また、河道は南から西へ流れていたことも、色の濃さからわかります。発掘調査のデータがよく表現されているといえるでしょう。

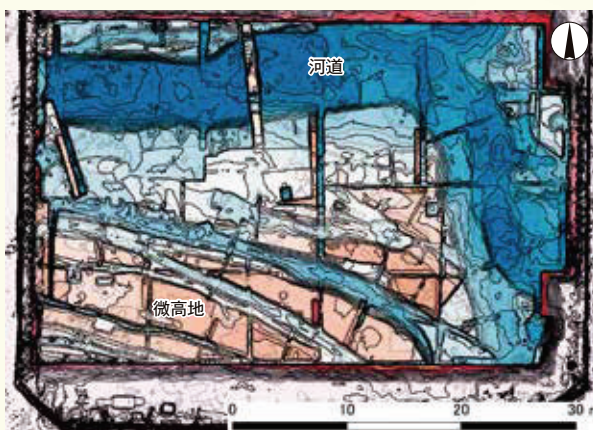
SfM-MVSを用いた測量は、従来の方眼紙に手測りで行っていた遺構実測図の精度と比較しても何ら劣るものではありません。むしろ、作業労力を削減できることやGISを用いて取得したデータの様々な加工や分析を可能にする点で、非常に魅力的な技術と考えられます。新たな技術によって得られた3Dデータから、これまで以上の情報をどのように引き出すことができるのか。今後も検討と実践を行っていきたいと思います。(山口 雄治)



ドローンによる測量の様子



撮影された写真によって生成された発掘調査区の3Dモデル



GISを用いて表示させた地形の段採・等高線図  
※段採は赤が高所、青が低所、等高線は5cm間隔

**編集後記** A.カミュの小説『ペスト』では、疫病で封鎖された街において、不条理な出来事に団結して対峙する人びとが描かれます。歴史から何を学び、いかに行動するか、今、問われています。(野崎)



岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
ARCHAEOLOGICAL RESEARCH CENTER, OKAYAMA UNIVERSITY  
〒700-8530 岡山市北区津島中3丁目1番1号  
TEL・FAX (086) 251-7290  
[ホームページ]  
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>